タイトル未定

黒木原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
タイトル未定

【Ｎコード】
Ｎ１２４５Ｙ

【作者名】
黒木原

【あらすじ】
メモ用です。まだ完結していません。

誰でも悩みは持っている、持っていなければおかしいのだ。なぜかそう、自分に言い聞かせなければならない気がした。

そうでないとやってられない。

自分だけが悩んでいるなんて思いたくない。

それだけ自己弁護的な回想をしておきながら、それでいてなんで俺はこうも傲慢に、自分の考えを押し付けてしまったのだろうと、それだけを、今はそれだけをひたすらに思う。

人の気持ちなんて他人にはわからない。なんてことはよく言われるけれど、わかってあげようともしないのは何か間違っていると思う。自分に置き換えてみれば簡単だ。誰にも理解なんてできない、そう思っている裏で、理解しようとしてほしい、親身になって考えてほしい、だなんて図々しいことを思っているのだ。

誰かの為に何をしようとか、自分の為に誰かが何かをしてくれるとか、そんなことを一途に素晴らしいと思う。だけど本音ではそれが、目的を持ったものになっているのではないか。

本当に、相手のことなんて考えているのだろうか。

つまりは、全部自分の為に人を道具として扱っている――そんなことを考えてしまう。

最も、普通はそんなに深読みするようなことじゃないんだろうけど、それでも、人との出会いと、人との関わりが、俺にそんなことを考えさせるような起因となったのだ。

それが悪いわけじゃない。むしろ感謝してる。

俺が生まれ変わるのは、自分の力と誰かの力が合わさってこそ、それができるはずだと、十二分に思い知った。

もちろん、その逆も然りなわけだけど。

――――――――　１　差し込んできた光――――――――

イケメンとモテるやつって同意義に思えて実はそうじゃないんだぜ？　と俺の友達は言っていたが、なんでそれを俺に言ったのか、未だに意味がわからない。イケメンでもなく、モテるわけでもない俺になんでそれを言ったのか。なんてことを考えているうちに、とうとう俺も高校という青春最後の船から降ろされてしまった。

つまりは、大学生になってしまったのだ。

いやまあたしかに、就職するやつらに比べたらまだ大学ってのは学生だし、青春の続きみたいなもんだとポジティブに解釈することもできる。

でもな、さすがにきついってもんだぜ。

高校からの友達が全くいないこの俺が、恋愛経験の全くないこの俺が。

いきなり、大学なんていうリア充と非リア充くっきりと線引きされる世界に放り込まれるわけだからな。

とまあそんな具合で、俺の大学生活はスタートした。

実家の神戸から新幹線で約３時間。俺はついにこの大都会、東京に君臨したのであった。　ものの２０秒くらいで標準語をマスターした俺に死角はない。なんて感じで勢いだけは盛りに盛った状態で

大学のキャンパスへと足を踏み入れたわけだが。まあアホ丸出しもいいとこだ。今日は入学式だってのに、俺だけが私服で来ていた。
もちろん私服のまま入学式に出られるはずもなく、式が終わるまで、適当にそのへんのベンチで時間を潰していた。
そして入学後の最初のガイダンス。これももちろん、新入生は全員スーツ姿だ。
やっぱり私服姿の俺は出られるはずもなく、教室の外でじっと耳を澄ませていた。重要事項は聞き漏らさないようにだ。
そう、俺はけっこう真面目なのだ。
真面目でありながら、かなりどんくさい。まあ一番ダサいタイプなんだよなこれが。
「新入生ガイダンスってやっぱあれだよな……友達をつくる最初の場になるんだよな……」　それを逃してしまった俺は幸先悪いで済まされるような事態ではない。これからどうすりゃいいってんだよ……。
引っ越してきたばかりの新居に向かう最中、俺はずっとそんなことを考えていた。都会の喧騒も、サラリーマンの足音も、キャーキャー騒いでいる若者たちも、なんだか気に食わなくてむしゃくしゃする。
最低のスタートだぜ……。
でも俺にだってまだ希望は残されている。新生活の中で、ひとつだけ希望の切れ端が手中にあるのだ。もちろん、何の努力もなしに得ようなんて思ってないさ。
と、俺は今日の失態を全て払拭するべく、母親から預かった地元の土産を持って自分の部屋を出た。
目的地はすぐ隣、そう、美人ＯＬが住んでいる隣の部屋だ。
引っ越してきた日、俺は隣の部屋に美人のＯＬが住んでいるのを目撃した。２５歳くらいでスラっとした体系、黒の長髪で整った顔立ち。スーツを着ていたわけではないので、ＯＬだという確証はないが、ここだけはやたらポジティブに、俺は彼女を勝手にＯＬだと

思い込むことに決めたのだ。
こんにちわ、隣に引っ越してきた澤崎という者です。
うむ、こんな感じでいいだろう。普通が一番だ。
と、心の準備を済ませ、俺は指先に全神経を込める。
ピンポーン！　と思ったより少し大きな音でチャイムが響く。
「……」
留守か……。
まあいい、夜あたりまた来よう、と俺はそそくさと自室へ戻った。

それから約３０時間ほど経過……。
「いつなら家にいるんだよ美人ＯＬ！」
とまあひとりごちながら俺は肩を落とした。まさか、美人ＯＬさんとお近づきになりたい、という下心を読まれてしまったのだろうか。うわーキモいガキしつけーなー。とか思われてないだろうか。
だって5回だぜ？　5回も行って留守ってことあるか？　会社の都合でどっかに泊まってるんだろうか。いやでも土日だし、普通なら休みだよな……。ちくしょー、こうなったら家の前で待ち伏せでも――
「君さ！　ストーカーはよくないよ！」
と、なんだか可愛らしくとげとげしい声が頭上から響いてきた。おい、これは俺の中の天使の囁きってやつか？　それならもう少し、もう少しだけ俺にストーカーを……じゃなくて、希望を持たせてくれ。
「君聞いてんの？　上だよ上」
「はっ……」
正気に戻った俺の視界に写ったのは、いかにも東京人って感じの小柄で可愛らしい少女の姿だった。ベランダからこちらを覗く姿は、まあある意味天使と言っても過言ではなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1245y/

タイトル未定

2011年11月1日18時27分発行